

第320回 研究発表会（平成29年10月25日）

前 段〔司会：下山 晃 教授〕

1. 発表者 林 妙音 准教授
2. 演 題 スコットランド近代繊維工業の発展と経済地域の形成
一亜麻と綿工業を中心に
3. 要 旨

1707年にイングランドとスコットランドの合同体制が成立し、ブリテン島に「グレート・ブリテン連合王国」が誕生するにいたった。スコットランドでは政治体制の改編を反映して、産業振興策の重点対象が羊毛産業から亜麻産業へ移り変わった。亜麻産業はスコットランドで1720年代から持続的成長をなし遂げ、地域の基幹産業とも呼ぶべき地位を占めるようになった。18世紀全般における亜麻産業の成長はスコットランドの近代化過程において次の二点で重要な意味をもっている。まず、亜麻糸生産のスコットランド全域への展開によって、ロウランドとハイランドが一つのまとまりを持つ社会的分業体制として統合されるようになったことである。そして、繊維製品の紡績、織布、仕上げ技術などを含む生産基盤、原料の輸入や製品の輸出を担う流通基盤、さらに資本形成と取引決済を円滑化する金融基盤は亜麻産業の成長過程で着実に域内で整備されるようになったことである。やがて亜麻産業の発展を通じて形成したこれらの諸経営条件を基盤にし、綿工業が1770年代にスコットランドで勃興するに至った。1770年代から1830年代にかけて、スコットランドの綿工業は紡績部門を中心に機械制工業へと発展した。また、綿布生産部門が良質綿布の生産に特化していたことはスコットランド綿工業の特徴であった。綿製品生産における機械制工業の成立を産業革命の象徴とみなすならば、この地域でもイングランドと時代を同じくして綿工業を主役産業とする産業革命が進行し、イングランドとともに資本制経済社会へ移行していたと見ることができよう。

第320回 研究発表会 (平成29年10月25日)

後 段 [司会：松尾 俊彦 教授]

1. 発表者 横見 宗樹 教授
2. 演 題 LCC が空港経営に与える影響に関する実証分析：
細分化した非航空系活動を対象として
3. 要 旨

本報告の目的は、LCC (Low Cost Carrier : 低費用航空会社) が空港の非航空系活動に与える影響に関して、成熟した LCC 市場を有しており、かつ体系的な統計が整備されているイギリスの2010年～2015年における16空港を対象として実証分析をおこなうことである。

今日の空港経営では、旅客ターミナルにおける物販事業や駐車場運営など、いわゆる非航空系活動の重要性が高まっている。わが国においても、多くの空港が経営改善の起爆剤として LCC の誘致を模索するなか、LCC 旅客が空港の非航空系活動に与える影響を明らかにすることは、空港当局にとって重要な関心事であるとともに、今後の空港運営のあり方に関する政策提言を導く上でも有益である。

先行研究では、「非航空系収入」を一括りにして分析を実施したものが一般的であったが、実際には非航空系収入の内訳には様々な活動領域が含まれているため、本報告では、これを「小売コンセッション」、「駐車場」、「不動産収入・賃貸料」と分割したうえで、それぞれに関する旅客あたり収入を被説明変数とし、LCC と LCC 以外の航空会社について国内線と国際線の離発着回数や座席数を組み合わせたものを説明変数として分析をおこなった。

分析の結果、つぎの帰結が導かれた。①小売コンセッション：LCC の「国際線」旅客は、空港における飲食店や商業施設で LCC 以外の航空会社の旅客よりも相対的に多くを消費する。②駐車場：「LCC と LCC 以外の航空会社の差異」よりも「国内線と国際線の差異」のほうが、より重要である。③「不動産収入・賃貸料」：主として LCC の国内線が多くを占める空港では、これらの収入は相対的に低水準である。

以上のとおり、非航空系収入における個々の構成要素に対して、就航する航空会社や利用する旅客が示す反応を正しく理解することが、空港経営にとって肝要である。

第321回 研究発表会 (平成29年11月29日)

前 段〔司会：宮坂 朋幸 准教授〕

1. 発表者 迫 俊道 教授
2. 演 題 十二神祇神楽の伝承過程における2つの「段階」
— 定着的段階と生成的段階 —
3. 要 旨

本研究では教育哲学者の生田久美子が日本の芸道の修練過程の特徴として提示した「非段階性（段階性）」の概念に着目した。生田は「段階」に関して出来上がりの段階と生成される段階という2つの側面について言及している。本報告者は社会学者の亀山佳明の定着論と生成論に関する理論的枠組みを援用し、2つの段階をそれぞれ「定着的段階」「生成的段階」として位置づけた。本研究では十二神祇神楽を継承する組織に対するフィールドワークから神楽の伝承過程における2つの段階、定着的段階と生成的段階、およびそこで神楽の指導者によって繰り広げられている具体的な出来事をインタビュー調査の結果やフィールドワークの記録から描き出すことを目的とした。

初めて神楽に関わる場合、学習者は神楽において必要とされる基礎的部分を習得していく必要がある。このとき指導者によって細かく丁寧な指導が行われる。これは「定着的段階」である。ある一定の技術を身に付けた後は、学習者は真摯な努力を継続し、わざを習得出来るまで待たなければならない。この間、指導者は学習者の様子を観察しながら学習者の自発的努力を待っている。指導者が「教えない」教育を行うことで、学習者の創意工夫が期待できる。

神楽の伝承過程は「定着的段階」として始まり、学習者の技芸の習熟が高まった後に「生成的段階」の局面に到達する。「定着的段階」から「生成的段階」へ、「生成的段階」から「定着的段階」へと局面は移行する。指導者に求められるのは、学習者の技芸の習熟状況がどのような局面（「定着的」或いは「生成的」段階）にあるのかを的確に把握することである。本研究では学習者の習熟状態を探るために、指導者が自分の身体を用いて、自らの行為を確認、吟味する場面（無言の身振り手振り）が確認された。

第321回 研究発表会 (平成29年11月29日)

後 段 [司会：池田 潔 教授]

1. 発表者 梅野 巨利 教授
2. 演 題 インドにおける CSR 活動の新展開
3. 要 旨

インドでは2014年から新会社法が施行された。同法で最も特徴的なことは、一定条件を満たしたインドで活動する企業は、「過去3カ年の税引き前利益の平均額の2%相当額をCSR活動に支出しなければならぬ」と定めたことである。同法制定以降、インド企業はどのようにCSR活動に取り組み、何が課題になっているのかを具体的な企業事例にもとづいて明らかにすることが本報告の目的である。

第1の事例は Nitta Gelatin India Limited NGIL である。同社は1975年の設立当初から地元農家に対する灌漑用水設備の提供、病院建設、学校支援などを行っていた。新会社法制定以降は、CSR活動が1つの仕組みとして体系的に組織された。具体的には、CSR活動のニーズアセスメント、活動内容と支出額の決定、活動の実施方法の決定、活動プロセスのモニタリング、活動の結果評価という一連の流れである。同社の場合、教育、ヘルスケア、生活向上、地域開発、環境の5つをCSR活動の柱としている。

第2の事例は AVT Natural Products Limited である。同社は、教育、スキル開発、インフラ開発の3つに重点をおいている。筆者は同社が実際に支援している地元小学校を訪問した。英語教育講師の手配と運営資金支援、校庭内遊具の設置、昼食場やトイレの設置などを行っていた。

第3の事例は Manappuram Finance である。同社は自社が設立した財団 Manappuram Foundation を通じてCSR活動を展開している。教育、ヘルスケア、女性活躍支援、高齢者支援、環境の5つを活動の柱に据えている。

いずれの企業もCSR活動を一つのビジネスモデルとして運営を試みているが、課題もある。とくにCSR活動に先立つニーズアセスメントの方法と活動実施後の評価の方法については、各社とも試行錯誤の段階にある。今後の課題はさらなる事例研究の調査と日系企業に対する知見の導出である。

第322回 研究発表会（平成30年1月24日）

前 段〔司会：塩田 眞典 教授〕

1. 発表者 新宮 潔 准教授
2. 演 題 関西弁とその外国語訳について
——村上春樹の独・英訳をてがかりに——
3. 要 旨

京都に生まれ、阪神間（西宮・芦屋・神戸）で育った村上春樹は、初期作品の舞台が阪神間であるにもかかわらず、登場人物にまったく関西弁を使用させなかった。自身をモデルとしたと思われる主人公が登場する作品群（『ノルウェイの森』『国境の南・太陽の西』『イエスタディ』など）においても、その人物に関西弁を使わせない。しかしながら、『アフターダーク』と『イエスタディ』においてようやく関西弁話者が登場し、言葉の使われ方もネイティブ作家ならではの見事なものであり、関西弁ネイティブの読者を違和感なく作品に引き込んでくれる。そして、これらの関西弁による発話が、外国語訳ではどのように扱われているのかという点に焦点を絞って考察したのが今回の発表の主たる内容である。

ふたつの作品の関西弁話者は、一人が大阪で犯罪に手を染め、闇社会から追われながら身を隠して働く女性。もう一人は生まれも育ちも東京であるにもかかわらず、タイガース熱が高じて、後天的に関西弁を習得した男性。結論的には、英語やドイツ語に女言葉・男言葉の区別があるわけではないので、彼女と彼の発話に表れる特徴は、ある程度くだけた下町風の言い回しが英訳に確認できる程度であった。作中発話者が完璧な関西弁を話すと語られるものの、英語・ドイツ語としては標準的な言葉といえるものがある。

じっさい、英語やドイツ語において関西弁に相当するような「方言」が存在しうるのかという問題、つまり歴史的にながく都であった地域の、本来は日本語の基準であった言葉が、急速な近代化の過程で標準語（共通語）にとっては方言とされてしまったような、そういう言葉が存在しないことが、とりわけ豊かな方言文化が生きているドイツ語の翻訳においてさえ、標準語話者と関西弁話者との言葉にそれぞれの特徴付けをしなかった理由として想定できるだろう。

第322回 研究発表会 (平成29年1月24日)

後 段 [司会：佐野 茂 教授]

1. 発表者 東山 明子 教授
2. 演 題 パーソナリティ特性からみたリーダー資質
3. 要 旨

リーダー資質について2つの研究報告を行った。まず、リーダーシップを発揮するリーダー資質を明らかにするために、リーダー経験の有無とパーソナリティの関係をアンケート調査と性格検査によって検討した(研究Ⅰ)。次にPM型リーダーシップが発揮されるパーソナリティ特性を明らかにするために戦績と幹部陣の性格検査との関係について検討した(研究Ⅱ)。性格検査にはYG性格検査と内田クレペリン検査法を用いた。

研究Ⅰ：一般大学生を対象に、質問紙によるリーダー経験の有無・回数・時期や重要度等の調査とYG検査の性格類型、△印(どちらでもない)選択数、各尺度%および内田クレペリン検査の類型、作業量、曲線特徴(発動性、可変性、亢進性)の関係を検討した。リーダーパーソナリティの特徴として、心的エネルギーが高いこと、情意が環境の影響を受けにくく動じにくいこと、自己を理解していること、じっくりよく熟考するが行動力もあること、等が示された。さらにリーダーには2つのタイプが見られ、一つは心的エネルギーの高いタイプであり、自発性が高く取り掛かりが速いが持久性に乏しく、短期間で多くの成果を出す場合に有効と考えられた。もう一つは心的エネルギーの高くないタイプであり、物事への取り掛かりや進め方は速くないが粘り強く堅実で慎重であり、ゴールまでが長期間である場合に有効であると考えられた。

研究Ⅱ：ある大学球技チームの11年間のデータから大学日本一の年とそうではない年の幹部陣のYG性格検査と内田クレペリン検査の類型、作業段階、精神健康度、曲線傾向について比較検討した。最後まで勝ち切りチームを頂点まで率いるためには、個性派や協調派であること(堅実派や活動派ではないこと)、心的エネルギー水準が高いこと、自己を知り決断が速く迷いがないことが、トップチームのリーダー資質として必要であることが示唆された。